

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行  
第8回フォーラム研究会  
逐語録

(木村) それでは、第8回フォーラム研究会を始めたいと思います。

先々週は、皆様、ご協力ありがとうございました。無事に5回のフォーラムが終わりまして、これからはその分析とまとめということで、現在インタビューを着々と進めているところです。8月いっぱいくらいで参加者のインタビューを終えることができるかなと思います。

現状はそんなところですが、まずは資料の確認をしていきたいと思います。議事次第が一番上にあります。F8-0です。次に、前回の議事録案。こちらはすでに皆さんにメールでお送りしていると思います。F8-1をお願いします。次が、第5回フォーラムのアンケート集計結果ということで、F8-2をお願いします。次に、第5回フォーラムの振り返りです。F8-3です。次が、第5回フォーラムの模造紙まとめです。F8-4をお願いします。最後に、A3の資料があると思いますけれども、こちらは去年の報告書の一部抜粋で、フォーラムのシステム化の表です。F8-5をお願いします。いかがでしょうか？

それでは、早速議事にしながら進めていきたいと思います。本日は第5回フォーラムの振り返りが中心ですけれども、時間があれば、その後、今回のフォーラム全体を見直して、システム化に向けてのコメントもいただければと考えています。あと、シンポジウムを実施しますけれども、時間があれば少し検討したいと考えていますので、よろしく願いします。

## 0. 前回議事録確認

(木村) 議事録の確認は、メールでお返ししていますので、何かあればご連絡をいただければということで、省略したいと思います。

## 1. 第5回フォーラムの振り返り

(木村) では、第5回フォーラムの振り返りに入ります。

F8-2からF8-4の3種類の資料を、しばらく時間を取って読んでもらって、また一言ずつ話をいただければと思います。前回書いてもらった振り返りも見ながら話してもらえればと思いますので、よろしくお願いします。それでは、10分間時間を取りたいと思います。

(各自資料に目を通す)

(木村) それでは、お一人ずつお話をお願いします。今日はどちらからにしましょうか。こう行きましょうか。では、どうぞ。

—— アンケートの感想が2つに分かれていると感じました。1つは、今回は温暖化ということで、議論が活発であったと市民の方がおっしゃっています。それと反するような意見が専門家であって、特にQ3の、「市民の考え方との差(受け止め方、整理法)」。同じテーマを議論しても、そこで差から見ると、それとも同じだと思って見るか、そういう視点の違いが感想の傾向を大きく変える原因のひとつかなと思いました。

あと、Q2の市民の意見で、「せっかくみんな『市民で』と設定された話し合いなのに、専門家が『専門家として』の視点、話しぶりだったこと」が物足りなかった、とあります。専門家として話し合いに向かい合う姿勢みたいなものがなかなか変わらないという感想がいくつか見受けられたことが印象的でした。ただ、温暖化というテーマの中で、改めてそういうことが認識できたのかなと感じました。

それから、私個人の振り返りのほうですけれども、私は、参与観察をしていた立場から、5回のフォーラムの中で、参加者がどのように変化したかという視点でまとめさせていただきました。場の中で共感を作ったり、お互いに向かい合う姿勢を作ったりしていくときには、「笑い」みたいなものが大事だなということを、5回のフォーラムを通じて感じました。

それから、ある姿勢を持っている人を「変える」というのは、自分が変わろうと思わない限り、なかなか難しいところがあるのかな、とも感じました。それが、「専門家は専門家としての態度に終始している」というような感想につながっているのかなと思いました。

あと、自分の疑問を率直に、分からないことを繰り返し静かに聞いていく方がいました。それに対し、専門家が、説明してこの人になんとか納得してもらわなければと前のめりになっていくような。意図的にそうしているわけではないと思うのですけれども、「この人になんとか分かってもらいたい」と思わせるようなものを持っているのだと思うのですね。それが何なのか、というところまでは、私は分からなかったのですけれども。そういう人がいると、姿勢が固まっている方も何とか自分を変えられるひとつのきっかけになっていくのかなと感じました。

あと、「サブファシリテーターがいてのファシリテーター」というふうに認識している人も、最後までいたのかなと思いました。サブファシリテーターが2人とも付箋の書き取りをしていて、ファシリテーターに注目が向いていないときに、ちょっと自分は休憩という感じで、隣の人と話し出すというシーンが何回かありました。ファシリテーターの役割が初めてのことなので、どうしてもサブファシリテーターに頼ってしまう。それが最後まで自分の中で抜けきれない。サブファシリテーターが自分に注目しないときは、ちょっとフ

アシリテーターを休憩してもいいのかな、とか。自立できていない状況を少し感じました。以上です。

(木村) はい。まずは紹介から行きましょうか。では、次の方、どうぞ。

—— はい。今回のアンケートの結果を拝見して、思ったことは、市民の方は、割と専門家と自分たちが違うということを知った上で、共通点を見つけていって、前に進むような印象を受けたのですが、専門家の方は、ポジティブな方もいらっしゃるのですが、知識の違いとか、考え方の差とか、差のことを取り上げている方が多く、原子力とは違う話題でも、自分のスタンスから離れないで、「相手が近寄ってこない」とか、「相手との差を意識する」という意見が多く見えて、少し残念な気がしました。

それから、Q8の専門家の方の感想で、「原子力の専門家と原子力を反対している市民とのフォーラムを開催してください」というものがありますが、なぜここにこういうことを書かれるのかが分からなかったのも、少し残念な気がしました。

あとは、サブファシリテーターをやらせていただいて、非常に勉強することが多く、ためになりました。反省する点は多々あるのですが、参加者の方も、それから私自身も、5回前とはずいぶん違う人間になっているのではないかと感じました。以上です。

(木村) ありがとうございます。次に行きましょうか。どうぞ。

—— アンケートの集計結果では、Q8で、専門家が、「専門家たるものは何か」ということを書いているのが気になりました。

それから、抑圧的という言葉が2回出ているのですが、これは少しニュアンスが違うのではないかなと。Q9の「専門家の話し方や態度が抑圧的で、上から目線に感じた」と、Q8の「専門家側の市民に対する抑圧的な態度は変わらなかった」ですが、この抑圧的はたぶんニュアンスが違う使い方だろうと思いました。

それから、今回は時間が足りないという意見は全然なかったのですが、かえって時間が余ってしまったのではないかと感じました。あるところで議論がもう飽和してしまっているのです。それがなぜなのか、いろいろ考えたのですが、原因はよく分からなくて。45分と55分間に、集中できる時間の限界が来るのかもしれないというのがひとつ。もうひとつは、この話題に関して、もうやったからいいやという、ある意味で投げやりな感じ。投げやりまでは行かないのですが、もうこれ以上はやらないという感じが出てしまった。それがなぜなのか、その原因がよく分からなかったのが残念でした。

(木村) それは振り返りに書いてありますか？

—— 時間のことは書いていないです。なぜかというのが分からなかったのです。45分と55分の間に、ちょうどいい時間があるのかな、とは思いました。

(木村) はい。では、次の方、どうぞ。

(前参加者) 今回は、運営側に参加させていただきました。第1回、第2回は完全に市民側で見ていて、運営側になっていませんでしたけれども、第3回くらいからやっと動き始めたかなと。タイムキーパーという仕事をしましたが、皆様のご協力でどうにか5回切り抜けました。ありがとうございました。

アンケートの集計結果を読んでもと、地球温暖化は私たちが生活していく中でとても大事な問題だということは皆さん意識していらっしゃると思います。市民の方のほうが、それをしっかりと受け止めてくださっているのかなという気がします。

地球温暖化は生活に密着しているのも、原子力以上に密着していることなので、そういう意味では、主婦の方がいた班の話し合いはとてもよかったのではないかと感じました。

全体としては、コミュニケーションが本当に大事なことだと分かってくださったら、このフォーラムはよかったのかなと。去年は、しゃべる側に来たのにまったくしゃべれず、とてもフラストレーションを感じながらでしたけれども、私としてはとてもいい経験をさせていただいたので、感謝しております。これからもこれが何かに広がってくれば、という期待を持っております。以上です。

(木村) では、次の方に行きましょう。

—— これで2年間終わったわけですがけれども、このフォーラムがますます有意義なものに見えてきました。

このアンケートで一番素晴らしいと思ったのは、当日の振り返りでもおっしゃっていましたが、Q3の市民の方のご意見で、「今回のテーマを原子力に置き換えて考えることができるなと気づきました」。この方は素晴らしいなと思いました。市民の方がこんなことに気づくなんて、予想もしていなかったことで。つまり、「原子力」というと、事故が起きた直後でもあって、感情論が先だつて、冷静に考えられなかったけれども、「温暖化」という問題を議論することによって、客観的に考えることができた。その温暖化問題を原子力に当てはめて考えると、いろいろなことが分かるようになったと。結論がどうあれ、こういう視点がこのフォーラムの目指すものではないのかなという気がしました。

私自身の気づきは、市民の方々のこういうご意見に触発されて気づいたのですが、専門家というのは、情報を持っていて、その情報を提供することが自分の存在意義だと思ってる人があるけれども、実はそうではなくて、情報を提供する役割は役割で必要なだけ、情報を提供した後は、市民の方と対等に意見を出し合うところに専門家の本当の

役割があるのだなということに気づかされました。いろいろな場で話をしたり、書いたりするときに、その姿勢は気をつけないといけないなど。そういう意味で、このフォーラムを観察していて、私自身、大変勉強になりました。専門家って、情報を持っていることで優越感に浸ってしまうところがあるのですよね。それが非常によくない。「抑圧的」というご意見も、まさにそういうことだと思えるのですけれども。情報提供することが自分の存在意義で、自分がえらくなつたような気になってしまうのだけれども、そういうところに落ち込まないように、専門家は気をつけてコミュニケーションしなければいけない。そういうことが、専門家側に求められる非常に大きな問題だという気がしています。けれど、このアンケートを見ると、専門家側でそれに気がついている方も何人かいらっしゃるの、それは素晴らしいことだなど。だから、気がつかない人よりも、気がついた人がいてくれたことに、このフォーラムの意義を感じました。以上です。

(木村) ありがとうございます。

昨日行ったインタビューで、同じような話が出ていました。

専門家の、情報提供をすることで満足してしまうという性質が、「人格レベル」になっているのだとすると、それは原子力業界だけの問題なのか、他の分野の専門家も同じ状態に陥っているのか。原子力という分野でずっとやってきたがために、専門家は専門家然として情報を提供することが仕事であると思込んだ結果、そこから出られなくなったのか。どちらなのか検証したい仮説ですよ、という話をしていたのですけれども。

どちらだと思いますか？

—— 私は、経済評論家にも同じようなパターンがあると思います。経済問題というのはやはり難しいところがあって、テレビの討論会などを聞いていると、経済的な専門知識を披歴することで、もう優越感に浸っていて、だからどうだというその後の意見がほとんどなく、それで終わってしまっている人もいます。

実は何年前に、文芸春秋が、経済評論家 24 人の通信簿をつけていました。その特集を組んだ人は実は知っている人だったのだけれど、厳しくそこをチェックしていました。だから、しょっちゅうテレビに出てきて、得意げにしゃべっている人はものすごく点数が低く採点されていました。この人は、専門知識を披歴するだけで終わっていると。こういう感じの批評をされていたので、やはり見る人は見ているなと思いました。

だから、私は原子力特有ではないような気がします。

(木村) ただ、怖いなと思ったのは、第 5 回の冒頭のコメントで、最初は地球温暖化になったのが納得いかなかったけど、「最後の回は、皆さんが市民として、地球温暖化について考えましょう」という私のメールで納得がいった、とおっしゃっていた方がいましたよね。あえて私もその発言を引いて、今日はそういうことなので、先ほども指摘がありまし

たけど、今日は皆さん市民として話しましょう、と強調した。かつ、C班の場合、サブファシリテーターさんが、今日は皆さん市民として、と言っている。四重で言っているのに、やはり専門家だったという点が怖いと思うのです。

—— ホワイトボードにも書いたのです。

—— やっぱり専門家になってしまうのですね。

いや、だけど、私は温暖化の専門家グループのディスカッションに加わっているのだけど、そこでの議論はもっとすごいですよ。ICPPの国際会議、毎年やるでしょう。15回くらいやっているのだけど、その専門家会合に出ている各国の代表は、もうそれで飯を食っている。要するに、結論が出てしまうとそこで終わってしまうでしょう。

—— え？ 適当にもめていないと駄目なのですか？

—— そうです。延々ともめ続けることが自分たちの利益になる。で、あれの専門家の方は、高給取りなのです。何億円でトレードしている。各国の代表を渡り歩いているという人もいます。原子力よりもひどいなと思いましたね。

だから、これはどこの世界でもありがちで。原子力もそうだけど、温暖化とか、専門知識を要求される分野になればなるほど、その傾向は強い。だからこそ、気をつけなければいけない。それがこのフォーラムのひとつの教訓ですね。そういうことを、木村先生が、学会で声を大にして専門家側に発信する。

(木村) そうですね。今のお話は、結論のひとつとしてかなり重要なポイントだと思います。

—— そういうコメントがいくつも出ているということは、専門家に対する批判として、専門家側は真摯に受け止めなければいけない問題ですよ。

—— 今、例として挙げられた原子力や温暖化や経済というのは、割とニュースなどで話題になるトピックで、説明してくれと言われる機会が多い分野じゃないですか。だから、マニアックな専門分野、例えば微生物の研究をしていますとか、そういう分野の専門家も同じなのかどうかに興味があります。普段はあまり説明してくれと言われない分野。

(前参加者) 私の兄は獣医なのですが、動物学会があつて、専門家の意識が強いです。

(木村) 動物以外の話題でも、説明したくなってしまうのですか？

(前参加者) いろいろ、自然とかもそうですし。

—— だけど、それはあまり議論にはならないでしょう？

(前参加者) ならないけれども、(獣医というのは) 狭い世界なのでしょうけれども、そこから自然保護の話などに入って行って。私たちの動物に対する考え方とはやはり違うなと。私はよく、固い、固いと兄に言っていたのですけれども。たぶん医学界でも、専門家というのがあります。

—— プライドがすごいですよね。

—— 学会と名がつくところに所属される方は、どうしてもそういう傾向はあると思うのですね。

情報というのは、情報そのものではなくて、誰が発信した情報なのかというところを、市民は重視していると思うのです。情報そのものは、同じ情報をくれますよね。立場が全く違っていたら、解釈が違うかもしれませんが。でも、純粹に情報そのものは、専門家であったら、そんなに違うわけがないと、私は素人だから思うのですけれども。その情報をくれたのが、自分が信頼している人なのか、特定の考えに凝り固まっている人なのか、人の話を聞かなくなそうな人なのか。そういうところで、情報がすっと入るかどうかが変わってくる。また、いただいた情報に対して疑問があるときに、ストレートに疑問を投げかけて、やり取りができるかどうかというのは、情報をくれた相手によると思うから、最終的には人間になってしまうのではないかと私は思うのですけど。

(木村) 今の話は、専門家というものが、どこまでは専門家的なふるまいをして、どこから先は市民のふるまいになるのか、という話ですよ。結果、あらゆる領域において専門家的なふるまい、つまり、情報を得るのが先で、その情報を発信するのが私の役割だ、というふるまいをしてしまう特性が身につけているのか、そうではないのか。そこら辺が知りたいところですね。

(竹中) そうですね。

(木村) テーマが「食品」だったら、絶対に専門家ではないですから、やってみたかったのですが。それでも知ったかぶりで話すことが自分の役割として身につけてしまっているのだとすると、もしその仮説が立証されると、これは文化を変えるのは容易ではないですよ。

—— それは人の生き方の問題だと思うのです。学会があつて、専門家がいて、それを自分の砦にしてしまうわけです。それで自分の人格が出来上がって、それで生活をしてきた。それを否定されてしまうと、その人はもう生きていけなくなってしまうのです。だから、専門家は、砂上の楼閣じゃないけれども、そんなところにしがみついていたら駄目だということに早く気がつけなさいといけない。これはだから、やはり人格ですよ。

(木村) この辺は、もしかすると次の研究テーマとして、出していけるのではないかというレベルですね。

—— 今度はいろいろな分野の専門家を集めると面白いですよ。原子力だけではなくて。

(木村) そうですね。それで、それぞれの分野についてのディスカッションを 1 回ずつやってみると、面白い結果が出るかもしれないですね。

はい、では、次に行きましょう。

—— はい。今の話の関連から申し上げますと、専門家と一般市民の話は、「社会技術概論」という本があつて、今たまたま勉強して、終わったところなのですが、専門家と市民には大きなギャップがあると述べています。市民は平等を欲する。平等であれば納得する。専門家は、特権階級というのでしょうか、専門の地位を守ることによって、自分の地位を保つ社会だと書かれていました。そこに大きなギャップがある。市民が専門家を見ると、専門職ということで、非常に上に見る。専門家は、市民は何も知らないのではないかと思っている。そうすると、なかなか議論ができない。

だけど、著者はこう主張しています。市民には、生活による経験知があり、これは専門家とは全然違うもので、実はこれが本当のギャップになっていると。議論をするときは、それがミスマッチして、お互いの意見の交流ができないと言っています。

その例として、食品の話が載っていました。食品の専門家と主婦が議論して、中国の食品を買うかどうかというときに、日本は大丈夫ですよといっても、本当は日本に来ているのではないかと言われた瞬間に、それが崩れてしまうのです。一般の人には、専門家の持っていない生活知があるので、本来はそこで平等に議論しないといけないのではないかと述べています。だから、原子力以外にも、まったく同じような問題があるのではないかと思います。

もうひとつは、このフォーラムの大きな目的のひとつに、ダイナミックに変わっていくという話があつたと思います。だけど、アンケート集計結果を見ると、専門家のほうがあまり変わっていない感じがするのです。話し合いを聞いていても、自分の砦で議論していて、市民が何を心配しているか、何を聞きたいか、それに対してどのように答えるか、



ということがあまりできていないのではないかと感じました。

それから、「専門家」って本当にいるのかな、と思いました。ある狭いところは知っているかもしれないけれども、皆さんが知りたいことはそんな狭いところではなくて、もっと幅広いのではないかという気がするのです。

ひとつ例を言いますと、1995年に、アメリカの外交評議会みたいところで講演する機会がありました。その前に、日本の専門家80人にインタビューをしました。石油とかガスとか、金融とか、皆に聞いたのです。そのときに、ガスの人も、オイルの人も、有限な資源だから、最終的には原子力はライバルだと言っていました。石油は40年から60年、石炭は300年ですけれども、ガスも当時は30年と言われていました。それで、アメリカに行って、外交評議会の事務局にその話を事前にしたのです。そうしたら、「石油があと60年だなんて、誰がそんなことを言っているのだ」と言われました。それは石油業界が作った幻であると。あと30年、40年でなくなると言わないと、価格が下がってしまう。もしほしと言われたら、もっと深いところも掘るし、海底も探す。今はそれを探していない。お金が儲かると思ったら探しに行く。だから、石油の量もガスの量も、本当は分からないところ、日本の専門家は有限だと言っている。

広くやっている人は、自分が何を知っているかを知っているから、ここは言うてはいけないということが分かる。ところが、日本の専門家は、知らないのに、言うてはいけないと思っているのではないかという感じがするのです。

もうひとつは、中国のことも勉強したのですが、中国は無尽蔵に石炭があるから、エネルギーは困らないと当時の中国の専門家が言っていたのです。その人とも話をしました。そうしたら、中国には石炭がたくさんあるが、内陸にある。そこでは、石炭を置くだけで自然発火してしまう。水をかけないと燃えてしまう。だけど、中国の内陸には水がない。中国はいろいろなエネルギーを探して、油田を探したけど、油田はほとんどない。ウランも探したけど、なかった。だから原子力も限界がある。そうしたら、海洋に出ていかないといけない。95年頃の話ですけれども。要するに、今問題になっていますが、南沙とか、海洋の資源エネルギーを買わないと、中国の経済発展はできないとその人は言っていたのですね。

何が言いたいかというと、日本の専門家は非常に視野が狭いのだけれども、見ている人はもっと幅広く見ているということです。

今回のフォーラムでもそれを感じました。専門家ということになっているけれども、本当に専門家だったのかなど。専門家が知っていることには限界があるから、一般の人から意見を聞いて、自分も勉強しないとイケない、という謙虚さがあるのではないかと思っています。それをあまり感じなかったというのが本音なのです。

とりあえず、非常にいい研究だと思うので、成果はあるのですけれども、専門家については少しがっかりしたなというのが実感です。

(木村) はい。まあ、今回の「専門家」というのは、その人がどういう専門家か、というよりは、周りから学会というレッテルで見られるときには「専門家」だと思われるだろう、ということで「専門家」というレッテルを貼っていますので。

—— それは承知していますが、その上で、専門家の人たちに、自分は知らないということ、この議論を通じて知っていただきたいなと思ったのですけれども。本当にちゃんと理解したのかなと。あまり変わっていないのではないかという気がしています。

—— 今の話に関連して。どんなに素晴らしい専門家と呼ばれる人たちを集めてきても、情報には限りがある。今回のフォーラムに集まってくれた専門家でも、十分議論ができるだけの情報量は、私はあったと思っています。専門家の情報量が少ないから、議論の質が高まらなかったということは、私はないだろうと思います。

今言われたのは、日本でも最先端の素晴らしい専門家といっても、世界に出ると、もっと上手がいる、ということですよ。OECD のエネルギー機関の部長をやっていた人に、石油の話聞いたとき、石油というのは地下何千メートルの話だから、何を言っても嘘がばれない。だから皆適当にもの言っている、と言っていました。石油は何年もつのか、電話で聞いたことがあるのですが、愚問だと一蹴されました。そんなのは、皆はったりを言っている。世界中のはったりが集まってくるのがこの場だ。だから私は誰も信用しないと。こういう答えをもらって、そういうものかと思いました。だから、専門家というのは、そういうものなのですよ。

(笑)

—— ただ、当事者は、自分の限界を、こういう議論を通じて知るべきだと思うのです。

(木村) それでは、次の方。

—— 私は、運営に関しては、うまくいったなと思っています。そういう意味で反省点はほとんどありませんでした。

一方で、これでいいのかなと分からなかったのが1点だけあって、それは、第5回に温暖化というテーマを持ってきたことです。原子力と少し離れた話題がやりたいというのは去年からずっと言っていたことで、それができたのはよかったのですけれども、何人かの方は原子力の話をしたかったとおっしゃっていて、参加者の満足度を少し落としてしまったのかなと。こちらが最初に、最後は原子力ムラの話をする可能性が高いですと言っていたこともありますし。そこら辺は、第5回を第4回に持ってきて、最後は原子力ムラ、という形もできたのかなと思っています。

先ほどお話があったように、地球温暖化のテーマをやったことで、こんな気づきがあるのかと運営から見ても思うような方が市民にいらっしまった。専門家の中にも気づいている方がいらっしゃるかもしれない。そういう人たちが、原子力以外の話題でそういうことに気づいた後に、原子力の話題にもう 1 回戻るといふ機会があったら、どうなったのかなということにすごい興味があります。まあ、今年もうできないのですけれども、インタビューの結果、原子力以外のテーマにしたことで気づいたことがたくさんあるようならば、そこで気づいた後に、もう 1 回原子力の話題をやってもらふという機会を設けるといふのは、やってみたいことだなと思つています。

—— 確かに、第 4 回と第 5 回をひっくり返したら、面白かつたかもしれない。

—— ただ、話したいことがありすぎて、そんなことやつてられない、と言われるかもしれないのですけれども。以上です。

(木村) はい。まあ、進め方なので、仕方がないのだけれど。参加者のほうで自主的にそういう話になれば、それでもよかつたのだけれど、ならなかつたので。

—— そうですね。そういう意味では、第 4 回の最後であんなに「原子カムラ」に票が入るとは思つていなかったのだから、びっくりしたのですけれども。

(木村) 原子力の話がしたかつた方がそれなりに多かつたのだと思つています。あそこで原子カムラにかなり票が入つたので、(温暖化というテーマで) よかつたといふ人もいれば、不満だつたといふ人も出ている感じですがけれども、まあ、でも、よかつたといふ人が割といたのだから。特に市民側の方は、よかつたと思つますといふ人が多かつたのだから、よかつたなと。

—— ゆっくり話し合ひができた感が強かつたのではないかと思つています。

(木村) そういう視点でこのアンケートを讀んでみて、どう思つましたか？ 振り返りを書いたときは、まだこのアンケートを讀んでいないから。

—— 私は、よかつたといふてくれる人がいるといふことは、最終回はこれでもいいのだなとは思つているのですけれども、だとしたら、最初から最終回はこれですよと提示すると、遺恨の残る人もいるだろうといふことで、そういうところは運営努力として氣をつけたほうがいいだろうと思つています。募集要項を見ると、第 5 回はこれなんだなといふ感じを受ける人が非常に多いと思つたのですよね。

(木村) その予定でしたが、と説明したでしょう。最初はその予定だったし。

—— そうですね。だから、それを変えたというのは反省点なのかなと。

(木村) では、次の人の振り返りが終わったら、1回休憩しましょう。どうぞ。

—— はい。まず参加者についてですけれども、「私は」よりも、広い視点で語りたい人が多かったのかなと思います。「私は何をやる」というより、世界にはこういう国があるとか、そういう話題が多かったのです。

あとは、今回も市民と専門家の話になっているという話が結構あったと思うのですけれども、C班がぶっちぎっていて、A班とB班はそれほどでもなかったかなという印象です。専門家の中でも、先ほど話があったような、説明したがるの性格になってしまう人とならない人が分かれているのだと思います。

それから、サブファシリテーターについてですが、ある班で、途中で専門家3人がペラペラ話しているシーンが5分か10分くらい続いて、その間に、サブファシリテーターがファシリテーターさんに小声で何かアドバイスしている声が、3回くらい聞こえました。3回目くらいになったら、サブファシリテーターが前に出て、バシッと切ってしまうてもよかったですのではないかと思います。以上です。

—— その3回目のときは、私も後ろからサブファシリテーターをつついて注意しました。

—— ファシリテーターが一向に動く気配がなかったので。ああいうときは、後ろからやっても仕方がないから、サブファシリテーターが出るしかないのかなと、岡目八目ながら思いました。以上です。

(木村) はい。では、10分間休憩しましょう。

(休憩)

(木村) そうしたら、後半を進めていきたいと思います。では、どうぞ。

—— 皆さんが先ほどからおっしゃっていることと同じで申し訳ないのですけれども、専門家の方も市民の方も、年齢や経験を積むと、話し方や考え方が固定されますから、市民の方も、特徴的には出ていないかもしれないけれども、硬い話し方とか、同じような考え方をしかしていないと思うのです。でも、専門家の方は、自分の生活に関することでも、そ

ういうふうにはしか考えられない、話せない人になっているのだなという印象が強いのです。なぜそう感じたかという、若い方や市民は、分かったとか、感動したというときには、一応それを表現するのですよ。でも、専門家の方はそれがとても少ないから、入る隙間がもうないのだなと思いました。

あとは、振り返りにいくつか書いたのですけれども、私の班には市民感覚がない人が多かったので、女の方がもう少しいるほうがよかったのではないかと少し思いました。今回は当てはまらないかもしれないですけれども。

それから、長い時間があると、まとめや発表は余裕があつてうまくいったのですけれども、話が深くはなかなかいかなかったのですね。でも、どういうわけか、B班は、深くなったかどうかは分からないですけれども、話が派生して行って、ああ、こんな考え方もあるのか、というような発表をしていたので、あそこと比べて何が違っていたのかを見て、システム化できるものがあるといいなと思いました。メンバーの違いと言われたら、もう話がそこで終わりですけれども。何かポイントがあつたのかなと思いました。

それから、「市民の立場でお話ししてください」ということをボードに書いたのは、私のアイデアなのです。あのときは、ああ、これがすごく大切だと思って、書いたのです。でも、悲しいかな、ボードは専門家の方の背中側にあつて、市民の人ばかりに見えるように書いてしまったので、3方向に書いてあつたらもう少しよかったなと思いました。

それから、サブファシリテーターについてですが、平等にするとか、ファシリテーターにうまくやってもらうとか、話が長くないようにするとか、いろいろありましたけれども、2年間のフォーラムの中で、サブファシリテーターのいい言葉をもし拾うことができたなら、「言葉集」みたいなものを作ると、参考になるかなと思いました。すごく大変でしょうけれども。以上です。

はい、どうぞ。

—— はい。私が見ていた班は、専門家の方も皆と同じ目線で、生活者として、「レジ袋がないとごみ袋に使いなくて困るよね」「そうだね」というふうに共感できていたので、市民と専門家の差はあまり感じませんでした。

「皆で」という意識が強かったし、ファシリテーターの方もファシリテーションが上手だったので、見える化もさっさとやっていただいたので、キーワードの書き出しと見守ることに専念できたと思ひまして、サブファシリテーターとしては非常にやりやすいグループだったのかなと思いました。

ただ、そのまま自由に議論していただくと、どんどん広がって行って、世界がどうという話になって行って、「自分の暮らしの中で」や「私たちにできること」というテーマからは外れていきました。ただ、そのテーマを突き詰めて話すことがこのフォーラムの目的ではないと思って、皆さんがそれぞれ何かに気づいていただくことが目的なのだろうなと思って、ある程度は仕方がないと思って、ずっと見守っていたのですけれども、途中で意見

が出なくなってしまったのです。やはり、話が広がりすぎて、何を話せばいいのかが分からなくなってしまったのだと思うのです。そのときだけは、何を話すべきかということに立ち返っていただくために、ちょっと言ったりしたのですけれども。そこで一旦自分たちの生活レベルの話に戻して、で、その話と、世界や社会の話の 2 つに分けて話をするという形にうまくまとめてくださったので、よかったなと思いました。

あと、模造紙が 2 枚になってしまったときに、レコーダーがふさがってしまったので、相当あたふたしてしまって、記録に大変迷惑をかけてしまい、本当に申し訳ありませんでした。

あと、個人的な反省で、字が汚いのが気になったり、タイピングに慣れているので、書き間違いが多く、普段から気をつけないといけないなと思いました。

—— すみません、下から 2 番目に書いてあることの意味が分からないのですが、どういう意味ですか？

—— 話が分散して、こことここで別々に話しているということに、自分自身が気づいたときはそうならないように何かしらのアクションを取ったつもりなのですが、それが発生していること自体に気づいていないことがあったらいやだなという不安です。

—— 自身の不安ですね。

—— そうです。私の不安です。

(木村) あと、今日休まれている方が同じ班だったと思います。パッと見てみて、これはこういうことだと思います、みたいなフォローがあれば。

—— 線引きというのは、たぶんグループワーク 1 のときにグループワーク 2 のテーマまで話が及んでしまったので、もっと早く声をかければよかったということだと思うのですが。

—— 「1 回ファシリテーターに確認せずに小テーマを提案してしまった」というのは、どういうことですか？

—— たぶんグループワークのタイトルづけだと思います。

—— ああ、そうですね。

あとは書いてある通りだと思います。

(木村) はい。では、次の方、どうぞ。

—— 私が見ていた班では、グルーピングも、私が最初に手を出してしまったりしたのですけれども、その最初の一瞬だけで、あとは皆さんでうまく協力してやってくださったのはよかったです。

グループワーク 2 に入ってから、対角線に座っていた 2 人が話し込んでしまって。模造紙のまとめを見ると、それなりに話は出ていたな、とは思いますが、電力の話に一時集中してしまったり、あとは、年配の方同士で、昔の話が盛り上がり。まあ、それはそれでいいのですけれども、そこをバシッと切ることができませんでした。

参与観察の方の振り返りに、「年代によるグループ化があった」というコメントがありましたが、グループ化というよりも、若い方がそこに入れないという感じで、ずっと聞きっぱなしになってしまったのです。それで、私はファシリテーターさんから 1 つ離れた席にいたので、付箋にいろいろ書いて渡したり、ひそひそ言ったりしていたのですけれども、埒が明かなくて、最終的には、もうある程度付箋が貼ってありましたので、「1 回グルーピングしましょう」と呼びかけて、その作業が入ることで、模造紙の上もまとまるし、話の流れも変わってくれるのではないかと期待して、そういう提案をしました。

で、時間的には余ってしまった、というより、考えてみると、あまり話が弾んでいなかったのかな、とも思います。うちの班は女性が 1 人だけで、生活目線の意見が少なかったのですね。一方で B 班は女性の方が 3 人いて、話がいろいろ派生していた。やはりメンバー的な影響は大きいなと思いました。私の班の模造紙を見ると、男の人の話の展開だなと感じます。それはそれでまとまっているとは思いますが、どこか教科書や資料に出てくるようなお話ばかりだったなという感じがします。いろいろな話が出るためには、女性と男性が同等にいるということもとても大事なのではないかと思います。極端に女性が少なかったのです。

サブファシリテーターとしては、私は去年からずっとそうなのですが、進行面はファシリテーターにアドバイスしなければいけないのだけれども、内容面では誘導してはいけない。その線引きがとても難しく、進行面でバシッと入ったら、内容面でも誘導が入ってしまう、そちらにも踏み込んでしまうのではないかと、その辺りが自分の中ではとても難しく、いい経験をさせていただきましたけれども、最後まで本当に難しかったなと思いました。ありがとうございました。

(木村) では、次の方、どうぞ。

—— 全体的な話はもう皆さんに言っていた通りなので、少し違うことを言いたいと思います。

まず、今、サブファシリテーターとしての反省点がいろいろ出たのですけれども、こういったものを忘れないで、またこういう場があるかもしれませんし、他のワークショップの場などでも、今回身につけたスキルを活かしていけたらいいなと思います。私は、メインの素人のファシリテーターがいるところを後ろからお支えするコツみたいなものは、自分なりに多少つかめたのではないかと考えています。嫌味なく少し介入するということです。

それから、専門家の方が自分の考えを変えないということが指摘されましたけれども、私ももちろんそれに同感なのですけれども、専門家の方が、自分が説明する立場だとか、いろいろ教えてあげる立場だ、というふうに思うこと自体は、別に結構なことだと思うのです。だけど、自分が説明しているときに、それを聞いている人の顔色をちゃんと読んで、分かっていなさそうだなとか、あれってというような顔をしたなとか、そういうサインを読み取る力が、申し訳ないけれども、非常にお粗末だなと思いました。

私がいた班でも、専門家が話しているときに、市民3人が、実は「えっ？」という顔を散々しているのですよ。だけど、それをちっとも読み取らないし、さらに説明するということをしない。

それから、ファシリテーターの方も、一生懸命やられて、かなりお上手だったと思うのですが、それでも、あれって思っている人の顔色を見て、「今のところ、何々さん、分かりましたか？」とか、「もしかしてご質問がありませんか？」というふうに振ることはできなかった。だから、参加者にとって、そういうタイミングで質問を引き出すようなことは非常に難しいのだなと思いました。発言をある程度平等に回すとか、長すぎる発言は多少抑えろとか、そういうことまでは、5回やればできるようになるとは思いましたけれども、そこからももう少し発展させたり、深掘りしたりするときには、人の顔色を見て、あの人が何か言いたそうだなという人に発言を振らないといけないのだけど、それをやるのはかなり難しいことなのだなと実感しました。だから、そういうことができる人がファシリテーションしないと、話し合いを深めるのはなかなか難しいのだと思います。

残念だったのは、牛乳パックを洗って出すことは無駄であるという話が出たのですね。それを聞いた方が非常にながかりして、最後の感想でもそれを述べていたので、皆さんもお聞きになったと思うのですが。実は、話し合いの中では、無駄であると言った本人が、別の切り口から見れば、無駄であるというわけでもないということを言っているのですけれども、すでに無駄であると言われたことにショックを受けた方は、もうそれが聞こえない状態だったと思うのですね。そのフォローがぼそぼそとした発言で、たぶんそれをキャッチできた方はいなかったらと思うので、残念でした。誤解したままだったらあまりにも申し訳ないなと思いました。

—— 誤解があるようなので訂正しますが、フォロー発言はありませんでした。



—— 別の切り口から見れば、とか言っていないでしたか？

—— 原則無駄、きれいな水を使っている限りは無駄、という発言しかありませんでした。

(木村) ありがとうございます。では、最後になります。お願いします。

—— では、今の話の流れで、牛乳パックの話と同様に、Q3 にエコバッグのことを書いている方もいるのですけれども、ここもフォローが必要だと思うのです。エコバッグは決して無駄ではありません。今みたいにあふれていることが無駄であって、持ち歩くことは大切なことなのだけでも、この感想だと、それもどうなのかな、みたいに思っているように見えるのですけれども。

私も、一般参加の人がくじ引きでファシリテーターに当たると、もう一言ここでフォローがあったほうがいいのか、ここの確認をしたほうがいいのかという話の深まりは、無理なのだと思うのです。だから、今回の温暖化のテーマに関しても、模造紙を見ると、やはり深掘りが足りていない気がするのです。例えば私たちがファシリテーターをしたら、この話の流れから、じゃあここはどうなのですかというふうにできたと思うけど、参加者にファシリテーターをしていただいているから、もうそれは限界かなと感じました。

それと、本当に残念だったのは、「個人でできること」に対する意見が少ないことです。ということは、やはり皆さんそれほどはやっていないのだなと。立派な意見は出ているのですよ。「社会システムを変える」とか。でも、具体的に社会システムを変えるために「自分は何をするのか」という意見は全然出ていない。どこかで聞いてきたような話とか、こうしたらいい、ああしたらいいというような評論的な意見ばかりで、本当に自分が思っていることが少ないのだなということが、これを見て分かりました。私たちの周りの人々というのは、やはりこうなのだなと思いました。

それと、5回のフォーラムを通じて、皆さんが気がついたことがたくさんあったりするのですが、このフォーラムに対する期待も大きいと思いますし、これをどういう形でシステム化していくかということも非常に大切だと思います。違うやり方ももしかしたらあるのかもしれないという期待もありましたし。メンバーによってどうこうというのは、もう仕方がないですね。毎回メンバーも違うし、グループも違うから。でも、そこで私たちが何を見つけていくのか、目指していくのか、拾っていくのかは、回を重ねれば重ねるほど明確になっていくと思うので、やはり回数を重ねることは大切だと思います。

—— 1 ついいですか？ Q4 のコミュニケーションのステップのところ、「共通点を知る」が、専門家は第4回で3人だったものが6人になっていて、ぐっと伸びているじゃないですか。その上の「お互いが異なることを知る」も3から5になっていますけれども。ここが3人から6人になったのは、やはり原子力から離れたテーマだったおかげではない

かと思います。

(竹中) インタビューを踏まえると、まだ専門家は 2 名くらいしかやっていないので何とも言えないのですけれども、実はこの「共通点を知る」は、市民に対してではないのです。専門家同士で、「温暖化の話をして、やっぱり私たちの考え方って同じだね」とおっしゃった方がとりあえず 2 人いて、え、そうなのって思っているところがあって。なので、そこだけは訂正しておきます。

—— ひとつすごいなと思ったのは、Q8 の市民の方の意見で、「ただ和やかに話し合いが進むだけでも問題がある」。これは非常に鋭い指摘だと思うのです。だから、申し訳ないけれども、サブファシリテーターの方たちが、和やかに話が進んでよかったです、なんていうのは、レベルが低すぎます。

それと、同じく Q8 で、「5 回のフォーラムの回数でちょうどいい。これ以上の回数だとなれ合いになる」、市民の人がこう言っているというのはすごいなと思います。

—— 確かに、この 2 つは鋭いですね。

—— はい。以上です。

(木村) はい。ありがとうございます。

全体を通して、何か言い忘れたことはございますか？

そうしたら、F8-5 を見ていただけますか。この A3 の表は、昨年度の報告書の中から取ってきているもので、フォーラムのシステム化のひとつの設計図ですけれども、フォーラムが目的を達成するために、1 から 10 番までの要件を洗い出して、それに対して、フォーラムの設計の、例えば参加者選定、場の設定、オリエンテーション、自己紹介、グループワーク、記録、あとは対話や対話ルール、ファシリテーター、サブファシリテーター、こういうものを縦に置いて、これらの場面で、どういう要件の満たし方をするかということを整理してきたものです。で、この整理にしたがって、今回のフォーラムのベースの設計を立てて、話題などを整理していったのですけれども、今回、5 回のフォーラムをやって、この表の中に新たに埋めるべきものがあれば、ということをお聞きしたいと思います。

いきなり全部について言うのは難しいのですけれども、前半の表 3-52 のほうは、フォーラムが目的としているコミュニケーションを達成するための 5 段階です。まあ、今使っている「コミュニケーションのステップ」とは、4 番と 5 番が逆になっていますけれども。「お互いが異なることの認識」から、「共通点の認識」、「異なることの許容」があって、「自分が変わろうとする気持ち」と「相手が変わろうとしていることの認識」がある。これらをどうやってフォーラムの中に具体的に落とし込んでいくかということで、昨年度を受けて

書いている段階ですね。

ここで1回区切って意見をもらったほうがいいですか？

(竹中) そうですね。

(木村) 今回、フォーラムを5回やってみて、気にしていたところは、ここに箇条書きで書かれているような部分ですけれども、その他、こういうことを考えたほうがよかったのではないかとか、ご意見があればいただきたいと思うのですけれども、いかがでしょうか。難しい質問だとは思いますが。

—— 今、コミュニケーションというのは市民と専門家のコミュニケーションとなっていますけれども、市民の中や専門家の中でそれをどのように考えていくかという視点はいらないですか？

(竹中) フォーラムの目的は、一応境界を越えるということで設定していますが。

—— はい。ただ、その中で、意外と今回は、専門家の中のお互いのコミュニケーションというか、市民の中でのコミュニケーションというか、

(木村) ただ、難しいのは、専門家とは何か、が分からないのですよね。そこをあえて分けることがすごく難しいということ。そういう意味で、「いわゆる専門家」、カッコつきの専門家としての学会員と、市民との話し合いを見ているのですけれども。だから、これはお互いの中でのコミュニケーションを想定して書かれているのですね。

そこに、専門家同士のコミュニケーションがどう寄与するかということも、もう少し深掘りしないと駄目でしょうか？

(竹中) うーん、まだ分からないですね。

(木村) 今の話は、分析として、ということですか？

—— そうですね。例えば第3回では、専門家が市民にいろいろ話をする機会があったけれども、そこで、専門家同士の中でのコミュニケーションというのはどうなのかなと思ったのです。

(木村) どうなのかな、というのは？

—— アンケートの中で、市民から見て、専門家の中で対立があるという意見がありましたよね。専門家の中のコミュニケーションというのは、また別の視点になってしまうかもしれないですけども。

(竹中) ええと、境界を越えるという目的のために、専門家同士の今言っていたような対立を制御したほうがいいのか、そうしたほうが境界を越えられるというのであれば、この中で考えるべきことだと思うのです。

ただ、そうでないのであれば、むしろそういうありのままの対立を見せることは、むしろ市民のためになっているかもしれないですし。わざわざここに書き込むことではないかなど。

あとは、その対立が境界を越えることに寄与しているかどうかを分析してくれ、という話だったら、これ（システム化）の話ではなくて、私が分析するというほうで、意見としてしっかり受け止めてやろうと思います。

—— 私が考えているのは、壁を越えるということとは少し違うかもしれないですね。

(竹中) 違う視点で、それをどうしたいのですか？

—— 専門家と市民のコミュニケーションというのが、ひとつ大きくここにありますよね。だけど、専門家の中のコミュニケーションのほうが、それ以前の問題として、もっと大きいかもしれないなとなんとなく思ってしまった。

(木村) うーん、今の話だと、あまり分析するに値しないのですが。

それは違う研究ですよ。違う研究の設計をしたほうがいい、という議論をしていますね？

—— そうかもしれません。

(木村) フォーラムの目的の達成のために、専門家同士のコミュニケーションが境界を越えることにどのように寄与したのか、という分析を経て、このシステムの中に、市民と専門家という観点とは明確に分離して入れるべきだ、ということだったらやるべきですけども、違う話ですか？

—— 違うと思います。そこまでは言っていないですね。

(木村) そこまで、というか、今のはそれよりも先のことですよ。

専門家同士の話し合いの場を作ればいいのか、という提案ですか？

—— いや、そうではないと思います。

(木村) だとしたら、何を言っているのか理解できていないです。

—— 専門家同士のコミュニケーションの場を作ることは大切かもしれないけれども、専門家としての資質の中に、専門家同士と、専門家と市民のコミュニケーションを、同じレベルで考えられるということが大切なのかなと。自分が相手のレベルに合わせて常にコミュニケーションが取れるということ。そこが肝心なのかどうかと私は思っていたのですが、あ、だんだん分からなくなってきた。ごめんなさい。

(木村) いや、その設定自体が、そもそも対等感を失っていますよね？

(前参加者) 市民側としては、そんなことは全然考えないで参加しています。日頃まず会えないだろう、話なんかできないだろう専門の方に出会えたことと、お話ができたということは、市民にとっては非常に有意義な時間だった。これは前回の 5 回もそうだし、今回もそうですし。そこで、いわゆる専門家と言われている人たち同士がどういうことをやろうか、それはそれで現実であって。市民側は、そんなことは何も考えないで参加していますので。

—— 私は、市民と専門家のコミュニケーションの成立というのが、幻想だとしたらいやだなというところがあったのですね。

(前参加者) そんなことはないです。

—— 市民の聞きたいことが本当に言えているのかということと、それに対して本当に答えてもらっているのかということと、それから、専門家が話してくれたという満足感がごっちゃになっているとしたら、

(前参加者) 5回参加したからといって、じゃあ専門家の言っていることが全部理解できたか、受け入れられたかということ、そういうことはないです。でも、それはそれでいい経験なわけですよ。その中で、市民側としては、また考えていけばいいことだし。私は、そういう考えはまったくなく参加していました。専門家の人は専門家の人で考えればいいことであって。

特に去年は、市民は原子力というものに対してもっと敏感でした。そういう中で、どう

いう話を聞けるか。いわゆる専門家ではないので、それを分析してどうのということではないですよね。普通に会話として、どう受け止められるか。どういうお話が聞けるか。こちらは何が言えるか。何を発言できるか。そういう思いでフォーラムに参加していただけないのです。だから、今言われたことは、市民側としてはまったくない感情ですね。

(木村) うーん、まだ言おうとしていることが分からない。

—— すみません。もうちょっとよく考えます。

(木村) いや、今言ってもらったほうがいいと思います。

—— 私は、今そちらの方がおっしゃろうとしたことは、難しい世界のことだと思うのです。実はこのフォーラム自身が、原子力と一般市民の方の境界をどうやって越えるかという、ものすごく大きなテーマ設定をしているわけです。

私の学生時代に、大学紛争が起きて、私は東大の学生だったのですが、全共闘という猛烈な嵐が吹きまわった。その後書物にも書かれたので、お読みになった方もいらっしゃると思うのだけれども。実は、あそこで問われた問題というのは、ここで問題提起している話と類似しているのです。昔は、大学というのはものすごい封建社会で、先ほども議論があったように、それぞれの先生が自分の専門性というお城の中に閉じこもっていて、もうその権威だけで受け付けない。対等に議論なんか、話しかけようものならば、平民の分際で何を言うか、みたいな世界でした。

で、話をずっとはしょると、結果的に何が達成できたかという、そういうお城を、殻を、打ち破ったのですよ。その当時、私は学生側の代表でそういう中に巻き込まれていたのだけど、先生側でそのときに議論した人が、吉川弘之という方で、「君たちの集まりに40年ぶりに顔を出して、言いたかったことがひとつある」と。何かというと、あの大学闘争のおかげで、私たちが変わったと。あの東大闘争が終わった後は、他の学部の先生、専門領域の違う先生と膝を突き合わせて話ができるようになった。それまでは、専門領域ごとに会話が通じない。未だに平行線の世界もあるけれども。吉川先生はその殻を打ち破って、境界領域の学問が進展した。あれは歴史的に大変価値のある出来事だった、というお話をされて。それは君たちのおかげだと。こうおっしゃっていただいて、私はすごいなと思ったのだけど。

実は、このフォーラムは、それに匹敵するぐらいのことを目指している。

だから、今そちらの方が言いかけたお話は、同じ原子力の中でも、やはり目に見えない領域ごとの壁があるのですよね。たぶん、このフォーラムのディスカッションの中で、そういう場面が垣間見えた。だから、そこを何か掘り下げることを考えたらどうか、ということ言われたのかなと私は思ったのですが。

—— ありがとうございます。私は、そんなすごいことというよりも、感覚的でどうしようもないのですけれども、市民と専門家の美しい誤解で終わることが一番いやなのです。その美しい誤解で終わらないために、何が要るかといったら、やはり専門家が専門家としてのきちんとした意識を持って、相手の言うことをきちんと聞いて、それに対して答える。ごくシンプルなことですが、それを専門家の中でもやって、市民に対してもやっていく。そういうことが必要なのではないかととても強く思いました。

(木村) ひとつは、美しい誤解がいやな理由ですね。

—— それは、誤解が誤解だと分かったときに、だまされたという感じを受けるのではないかという気がするからです。そうではないかもしれませんが。自分のケースで考えたら、やはり美しい誤解は取り除いておきたいなという感じがするからです。

—— では、美しい誤解は、専門家同士のコミュニケーションを重ねることでなくなるのですか？

—— いや、そうではないと思います。それはとても難しいから。専門家と市民の間で美しい誤解を生まないために、専門家が一致団結しろと言っているわけではありません。ただ、専門家であれば、専門家としての、お互いにどういうことがあるというのが分かるでしょうけれども、その人たち自身が、その、

(木村) ああ、分かりました。いわゆる知識のレベルを議論しているのですよね？ 要は情報の話ですね？ 原子力情報のレベルの話をしているから、その場の雰囲気ですら専門家の間違ったことを言っていて、その場は受け取ってしまったけれども、あとでその情報が間違っていたということが分かったときに、その美しい誤解は問題が大きくなっていく、という話ですよ？

コミュニケーションの目的の中で言うところの、私たちはどちらかというとメタの話、信頼をどう構築するか、お互いの人間性をどう理解していくのかという議論をしているので、こういう目標を立てていますけれども。

原子力情報を専門家から市民に伝えるというスキームの中で起こる誤解をどうしたらいいか、という話をしているのですか？

—— いや、

(木村) 違うのですか？ 人間性が誤解されるということ？

—— 私はそういう意味で言っているつもりはなくて、あ、でも、分からないです。

(木村) もし、その美しい誤解が、いわゆる原子力情報の伝達の中で何かしらの問題を引き起こすという議論であれば、それはちょっと今回の目的ではないので。それは課題としては出てくるかもしれないけれども、ちょっと違うのですよ。

要は、カッコつきの専門家で議論していたというのはそういうことであって。本当の専門家を呼んできたら、そんな議論はできないわけですから。でも、本当の専門家といっても、先ほどお話があったように、1人で全部分かっているわけではないと。でも、あるレベルの人たちが集まっていれば、なんとなくいろいろ議論できることはある。そういう場を作れているということですから。

だから今回のフォーラムでは、人となりなどを理解して、まずは尊重する。専門家といえども、必ずしも万能ではなく、1人の人間であって、自分たちと何ら変わらない。少し情報量が違うだけでしたね、というのが最初の認識としてあって。だから個人でお付き合いしていくことはできるし、相手もやはり間違えるときは間違えるし、そこをことさらに非難しても仕方がないというところまでの信頼感がもしできたらすごい、という話なのです。

だから、その根幹に入ってくるようなレベルの誤解の話をもししているのであれば、かなり突っ込まないといけないと思うのですけれども、どうですか？

—— そこまで突っ込めないです。

(木村) 竹中君、どうですか？

(竹中) うーん。情報提供の話には突っ込みたくないなと思います。そこは目的にしていけないですし。

(木村) そこを言い始めると、一昔前のリスクコミュニケーションに戻ってしまうのですよ。情報提供をどうするか、みたいな。

—— そうですね。情報提供のリスクコミュニケーションのレベルにこのフォーラムが行ってしまったら、ちょっとベクトルが違うと思うので。私もあまりそこは踏み込みたくないです。

(竹中) むしろ、そこに関して言うならば、「ここは自分の分野ではないので、確かかどうかは分からないですけれども、でも私はこういうふうを考えています」という説明の仕方をされていた方がいましたよね。それを聞いた他の専門家が、ああいう説明の仕方をす



ればいいのか、という気づきがあったと言っていて。そういうことでいいのではないかと  
思うのですね。その情報が正しいかどうかというレベル上げ云々よりも、自分の持っている  
情報をどのように伝えたら、一番よい伝わり方をするのかということ、専門家がどう  
気づいてくれるのか、とか。ここではそちらを議論したいと私は思います。

(木村) ただ、今の話にもしかしたら通じるかもしれないのは、インタビューで聞いた  
市民の方のご意見ですが、結局、市民の方と専門家の方が仲良くなってきて、フェイスト  
アップフェイスで話せると、細かいことまで聞いていけるので、たくさん聞きたいのですね。  
だから、それはいいことだと思うのですが、ただ、そうすると、「これはこうなので  
すか?」「これはこういうことですよ」「ああ、そうなのですか」と受け止めてしまって、  
その情報自体を疑うみたいなことはあまり期待できない、という弊害もありそうですね、  
という話をしていたのですよ。

—— それは、「なれ合いが起こる」というコメントがあったけれども、そこに通じると思  
います。それは確かにあると思うのですね。親しくなれば、この人の言うことだったら間  
違いなさそうだなと思いついで、その人をオールマイティ化してしまう危険性がある。  
実はその人は何でも知っているわけではないけれども、まあ、情報量としては持っている  
から、自分の持っている情報をいっぱい出そうとしてしまう。そうすると、相手が誤解す  
る。それはありますよね。

—— でも、そうだとしたら、問題は専門家ではなく、市民のほうですよ。

—— そのときに、専門家側としては、ここはちょっと危なっかしいですよという注釈を  
一言添えて伝えれば、受け止め側も、ああ、そういう前提つきなのだなと思える。それは  
大事ですよ。

—— あと、市民としては、いただいた情報に関して勉強したいという気持ちが本当にあ  
れば、手がかりをもらったということで、今は、調べようはいくらでもありますよね。だ  
から、自分なりの確認はできると思うのですよ。レベルの高低は別として。

私も実際に、元気ネットにいと、いろいろな冊子をいただいたり、地域ワークショップ  
に出たりすることによって、求めなくても情報が入ってくるという贅沢な環境にあるの  
ですけれども、でも自分から調べてみようと思うこともあって。でも、自分から調べてみ  
ようと思っても、例えばインターネットひとつ引くだけでも、「放射線情報」で調べると、ア  
クセス数の多いものから出てきますよね。で、一番のところを開けると、バリバリの反対  
派のページだったりするのですよ。読んでいて勉強する意欲が下がってしまうような極端  
な情報ばかりで。

だから、その手がかりを教えていただける場と思えば、いいのではないかなど。振り返りの中にもどこかにありましたけれども、市民も少し勉強したほうがいいのではないか、みたいな。そういうことは必要だと思うのですね。なので、情報というのは、その人からもらった情報が万能というのではなくて、勉強の仕方を教わるとか、手がかりをいただくとか、そういうつもりで接したらいいのではないかと思います。

それにしても、やっぱり、それを下さる方とフェイストゥフェイスで話したときに、説明の仕方とか、言葉使いとか、態度とかで、そうしてみようと思えるかどうか、というのがあると思うのですよね。市民としての姿勢は、そういうことが大事じゃないかと思いません。

—— 専門家の方は少しお気の毒だなと思うのは、もう自分の言っていることが全部正しくて、相手にもきちっと受け取ってもらわなきゃいけないという責任感と使命感があるのです。でも、市民のほうも、会えてよかったです、今回はよかったですと言っているけれども、ほとんど分かっていないかもしれない。たぶんそれが美しい誤解だと思うのですけれども、また違うところで話を聞いて、自分がこうだと思っていたものが思い違いだったり、誤解だったと分かったときに、その情報をくれた人が悪いとは思わなくて、市民は、ああ、誤解だったんだ、と思うのですよ。いくつもいくつも情報が来るうちに、ああ、私としてはこの範囲が分かった。そうすると、今度は自分で判断するのですよ。

だから、情報をいただく回数と人が増えたほうがいい、と思ってくださったほうがよくて、ご自分が言ったことでその人の全ての知識を満足させてあげなくちゃ、という考えはお捨てになったほうがいいと思いますよ。だからすごく苦しいのだと思うのです。

(前参加者) そうだと思います。市民はそこまで深く考えていませんし。

でも、フォーラムに参加したことで、原子力という字がやたらと目についちゃうとか、それも一歩ですよ。

—— 今話すべきは、もう少し違うレベルの話なのではないですか？ 情報がどうかこうとかではなくて。このフォーラムはコミュニケーションを前提としているわけで。じゃあコミュニケーションをどのように進めていくと、信頼が得られるかとか、そういう議論をしているはずなので。もう情報の話はやめませんか？ 時間ばかりなくなるので。

(木村) 逆に言うと、学会などではそういうところが突っ込まれるのだらうなというのは、今、想定しました。なんとなく神話があるのですよね。正しい情報をずっと出しておけば、誤解なく受け入れられるようになるのだらうという神話があるので、そこに対してのアンチテーゼとして、ひとつ反証事例として出せるような気がします。

だけど、基本的には、これはフォーラムの中心の事柄ではない。付随的に分かってくる

おまけなので。なので、このくらいで話は打ち切って。

では、何か言いたいことがあって止めていただいたのかなと。

—— いやいや、脇の話で延々と続きそうだったから、止めただけです。

—— 「話題設定」の1つ目と3つ目の違いが分からないのですが。「お互いの価値観を表明できるような話題を設定する」。

(木村) ああ、これは一緒ですね。そう、こういうミスがいろいろあるのです。

—— この「話題設定」のところに、原子力のテーマにこだわらなくてもいい、原子力以外のテーマでもいい、というような内容を入れてはどうかと思います。

(木村) それが、この「お互いの価値観を表明できるような話題設定」なのです。結局、原子力だけだと情報のやり取りにしかならないので、そうではなくて、「私はこの問題に対してはこう思います」という話をちゃんとやるのが大切だ、ということで入れたのです。

—— ああ、ここにその意味が入っているということですね。

—— 単に情報が行ったり来たりでは人となりは見えず、  
「私はそれに対してこう思う」という発言をしたときに、初めて人となりが見えてくるのですよ。だから、そこまでのものが出るようなことが大事だと思うのです。

—— そうすると、先ほど、いわゆる「深める」ということは、参加者にファシリテーターをやってもらったら、なかなかできないと言っていたのですけれども、やはり深めるということは、人なりを知る上で必要になってくるということですか？

—— 私はそう思います。上辺の情報だけで発言していると、見えない部分がありますよね。もうひとつその先にいくと、その人の生き方や姿勢や価値観が見えるのですよ。そこが信頼につながっていくのではないかと。私が人を見る判断はそこなのですけれども。

—— 例えば、ソニーの経営のやり方で、10回なぜなぜ質問をするのですよ。なぜですか。その答えをする。そうすると、またそこに対してなぜそうしたのですかと。10回掘り下げて、初めて本質が見えてくると。

専門家の役割は、少なくとも原子力の専門家はそれを生業としているわけですから、なんでもかんでも掘り下げしていないにしても、自分の得意分野は毎日毎日考えて、掘り下

げをしているはずだから、こういうところはこういうふうに掘り下げがされていますよということを皆さんに紹介して、掘り下げの糸口を提供するのが専門家の役割だと思うのですが、今回は、単なる情報提供しかしなくて、掘り下げのアドバイスが少なかったような気がします。掘り下げが、なぜなぜ質問が、少し足りない。

—— それは、例えば温暖化に関してどれだけの情報を、10 持っている人なのか、3 しか持っていない人なのかで、要するに、10 持っていたらいろいろは言いますよ。だけど、それは情報量が多いだけであって、それがコミュニケーションを深めたり、お互いの信頼を築いていくことに本当になるのか、というところだと思うのです。

—— 先ほどの牛乳パックの話だって、掘り下げていけば面白いと思うのです。上辺だけで終わってしまうと、先ほどおっしゃったように、なんだか消化不良で終わってしまう。そこはやはり掘り下げていかないと面白くないですね。

(木村) なるほど。それは確かにありますね。

—— だから、ここの「フォーラムの設計」のところ、掘り下げを深めるための何かヒントを入れたらどうでしょうか。

—— 例えば5回やるのだったら、3回目くらいで、掘り下げられるようなテーマ設定をすることで、人となりを参加者同士がぐっと分かった上で、4回、5回を迎えると、また全然違うのかなという気がするのですね。

—— できるだけ身近なテーマのほうがいいですね。皆が掘り下げられるような。

(木村) 今回はそういう意味では、第4回の設計が割と受けがよかったのですよね。とりあえず自分の立場は置いておいて、いいという話と、悪いという話と、それぞれに対してちゃんと考えていく。

—— あれはよかったですね。両方の立場で意見を出し合おう。ああいうテーマ設定は面白いですね。

(木村) そうすると、片方の意見しか持っていない人は、反対側になってもその意見しか言えないので、すごく薄っぺらな意見しか言えなくなってくる、というのが見えてくるので。あのスタイルをもう少ししっかりやるというのもひとつの手だったかもしれないです。

あとは、今の話だと、「私は」という言い方が大切なのかもしれません。

—— そうなのです。「私は」の価値観になるのですよ。

—— 参加者のファシリテーターの人が議論を深めることができないひとつの理由に、進行に手一杯になってしまっているところがあると思います。もし、「深める」ということだけに専念できる状況を作ってあげることができたときに、それでも参加者が話を深めることは難しいのか、それなりに参加者はできるのかというと、どう思われますか？

—— それは参加者がファシリテーターをしないということですか？

—— 進行ではなくて、「深める」ということだけのファシリテーターに専念する。

—— 参加者は難しいと思います。

—— 私がちょっと頭の中で思ったのは、進行役のファシリテーターと、深めるためだけのファシリテーターを置いたときに、

—— 深めるためのファシリテーターは、参加者なら無理だと思います。やはりそれはある程度経験を積んだファシリテーターでないと、できないですよ。

(木村) それはすごくテクニカルな話だから、無理ですよ。

—— それに、進行と深めることは、分離できないでしょう。

—— 同時ですよ。その場の雰囲気、顔色、話の流れ、先を見越してやるのがファシリテーターで、それが深める役割なのだから。

(木村) そうですね。今回、「ファシリテーター」と呼んでいるけれども、やっていることは司会進行役なので。そのくらいだったら参加者でもできると思ったからやっているものであって、それ以上は無理ですね。

むしろここで聞かなければいけないのは、「深める」のはプロのファシリテーターにしかできない専門技能だから、そのファシリテーターが、話題誘導でないとか、参加者から信頼を得るためにはどういったことが必要でしょうか、ということですね。おそらく、そちらのほうが重要な質問になってくると思います。

—— そうですね。そのポジションに誰をつけるかというのはものすごく大事ですよ。

(木村) そうですよ。で、F8-5の後半の話になりますが、「運営能力への信頼」から始まって、「話題を誘導しない」「参加者の公平感」「参加者間の対等感」「参加者間の尊重感」を踏まえた上で、例えば、ファシリテーションの専門家がファシリテーションしていこうとするときにはどういうことに気をつければいいのか、ということをはっきりさせたほうがいいかなと思います。

—— 関係するかどうかあまり自信がないのですが、私が前に研修を受けたときに、グループワークをして、そこには一定のルールがあったのです。で、その見張り役を立てるというルールがあったのです。5~6人のグループなのですが、その中に、見張り役に専念して、自分の意見は言わないという役が1人いたのです。

—— 参加者がですか？

—— 参加者が。まあ、参加者といっても、身内の研修みたいなものだったのですが。それで、見張り役の人は、皆がルールを守っているかどうかだけを見張る。

—— 見張り役は、ここでファシリテーターはこの人に振るべきなのに、振っていないというときに、何か後ろで背中をつつくとか、そういうことをするのですか？

—— その瞬間にはっきり言うというルールでした。あなた、今ルール違反していますよと。例えばそういうものもありました。

—— 後で言われても分からないですからね。流れているから。

(木村) 見張り役もプロですよ？

—— そのときは、でも、参加したメンバーの1人がやっています。

—— ただ、それは、例えば原子カムラとか、こういうテーマでなければ成立すると思うのですよ。これはものすごく公平性を担保しなければいけないテーマじゃないですか。そういうときに、身内の見張り役で本当にいいのかというのがありますよね。自分たちの課題としているテーマをワークショップでやろうというなら、それはそれでいいと思うのですが、広く社会的にこれから出していこうとするには、ものすごく公平性が求められているわけで、それにはやはり身内の見張りは駄目だと思うのです。

—— 今回は第3回でサブファシリテーターがファシリテーターをやったじゃないですか。あのときは、参加者がいきいきと意見を述べていたと思うのです。表情を見て、疑問を引き出していくというか。前半の「対話」のところに、「フェイストゥフェイス」という言葉がありますが、そういう簡単な言葉ではなくて、「相手の疑問をくみ取る」とか、そういう具体的な言葉を加えてほしいなと思うのですけれども。

で、あれは、自分たちが大変さを分かって、やってもらうことで、初めて、やってもらっていることの公平さとか、ファシリテーターの役割も理解を深めることができたと思うのです。自分たちが体験することで。だから、信頼という意味でいえば、自分たちがどのように対話を進めていかないといけないかということを確認する上でも、3回目くらいにきちんとお手本が出て、ああ、こういうことだったのか、というふうに分かる機会を作ってあげることはとても大事で。その後、テーマを深めるのであれば、以降はサブファシリテーターがファシリテーターをやっていきます、でもいいし。そこはそういう、

(木村) 言っていることがよく分かりません。

—— あ、ええと、ひとつは、参加者にファシリテーターの役割とか大変さ、公平さを保つということがどういうことかを体験してもらうことで、

—— 今は、参加者がファシリテーターをやって、話が深められるかという話をしているわけだから、では、そういう経験をすればできるということですか？

—— やり方として、例えば「相手の疑問を必ず捕えるようにする」とか、そういう、

—— それをここに記入するという意味ですか？

—— そうです。それを、

—— そういうことが記入されれば、一般の参加者でもできるということですか？

—— できると明言できるかどうかは分からないけれども。

(木村) あの、記入するのは簡単なのですよ。だって、コミュニケーション・マニュアルを全員に配っているわけですから。でも、それを読んでもできるわけがないから、このように大切なものだけをピックアップして、ルール化して、10項目にしたのだけど、参加者からは10項目でも多いと言われていきますからね。いきなり10項目を自分だけでコント

ロールして、全て守って、さあ、意見を深めるまで話し合えと言われても、それはたぶん無理です。

—— 最初は無理だと思うので、3回目くらいに、

(木村) いや、1回くらいの研修でできるかといったら、できないですよ。

—— もちろんそれはできないですけども、全然経験しないよりはできるようになるかもしれないし。

—— だけど、聞いている人の顔色を見て、ちゃんとその人に振らないと駄目だという話があったけど、実際にはそんなことは書いてできる話じゃないですから。

—— できません。

(木村) 参加者の公平感とか、話題誘導をしないという意味で、進行は参加者にお任せするというスタイルにしたけれども、加えて、今期は前期に比べたらかなり手の込んだ進行表にしたけれども、それでもそこまでの深掘りは難しい。もう少し時間があれば、というのもあるかと思って、最終日は長くしてみたけど、今度は時間が余るだけなのですね。

—— 自分の生活のことについて話し合えば、難しいから、一旦議論が停止してしまうこともあると思うのですけれども、そこを超えればすごく深まっていくと思うのですけれども、「自分たちでできることってないよね」で終わらせてしまっ、別の話題に進んでしまうから、それを止める人がいないと、

—— それがファシリテーターでしょう。だから、参加者のファシリテーターではできなかったということですよ。

—— 深掘りをするということと、話の誘導にもならず、公平に話してもらうということの兼ね合いが、非常に難しいと思うのですよ。

(木村) 難しいですよ。

—— だから、もし人となり分かるように、少し公平感はなくなるかもしれないけれども、話題を掘り下げていくのだったら、やはり参加者ではなくて、それができる人がファシリテーターになって、今日はそういうスタイルにしますと言って、やったほうが効果は



あるかもしれないですね。

—— 今年度は、昨年度の反省を活かして、主催団体の紹介とか、サブファシリテーターをやる私たちのこともきちっと紹介してからやったので、不信感みたいなものは全然なかったように思うのですね。だから、第 3 回でファシリテーターをやらせていただいても、皆さんから不満とか、誘導じゃないかみたいな疑惑も全然なかったの。だから、できないことではないですよ。

(木村) できないことではないです。ただ、第 1 回、第 2 回があつて、第 3 回だからオッケーだったのか、第 1 回でも、あれくらいの説明をしておけば、ああ、そういうものかと受け入れてもらえたのか、それは分からないですね。

—— 第 1 回、第 2 回で、多少なりともファシリテーターの経験者が参加者の中に出てきたところで、第 3 回くらいに、ファシリテーターを私たち運営側がやることになったら、その苦労も多少分かり、あるいはうまくいかないなというのも多少あったりした中で、私たちがお手本みたいにできれば、いい効果はあるかもしれないけれども。

—— 参加者は、ファシリテーションそのものが分からないわけじゃないですか。で、この人が急にファシリテーションをやりますと言ったときに、やはり「えっ？」って思うし。自分がちょっと経験していると、ああ、こういうことなのか。難しいということも分かって、受け入れやすいのかなど。

—— いや、そこまでは分かるけど、今は、深掘りができるかどうかという話をしているのですよね。

(木村) 深掘りをするためには、プロのファシリテーターが必要になる。でも、ファシリテーターをあてがうと、相手の認識としては、話題の誘導になってしまう可能性があり、信頼には欠ける可能性があつて、相克するという話ですよ。

ひとつあるとしたら、今回みたいな導入から、第 3 回で運営側がファシリテーションをやったときにうまくいったと。だから、うまくいっているかどうかを毎回チェックしながら、やばくなったらファシリテーションを（参加者に）あげて、1 回信頼回復に務め、やっていくとか。そういうことになるかもしれないですね。必要なときだけやる。話題によっては、表面の情報を整理する回もあるし。そのときは参加者でもいいわけですね。

—— そうですね。毎回深掘りしなければいけないわけじゃないですよ。

真ん中辺りで、その人の人となりが見えるような発言ができるところまで深掘りができ

れば、もうそれでよくて。それ以降は、表面的な話であっても、「ああ、あの人ってこういう人なんだな」という認識の下で話し合いをするわけだから。そこが大事なのではないですか。

(木村) そういう意味では、今回の第3回はうまくいったのかもしれない。逆に言うと、それで見限る人は見限ってしまったのかもしれない。

—— ただ、毎回できるかどうかは分からないですよ。あれはいろいろなことが重なった結果だと思っているのです。

—— テーマ設定だと思うのですね。

—— 深掘りしようと思うテーマは、原子力と関係のないテーマにすればいいのではないですか。そうしたら公平性も何もないのだから。偏りもしないし。誘導にもならないと思います。

—— 誘導の問題は、話題設定で意外と解決できるかもしれませんね。あとは、公平に話してもらうように、極力気をつける。気をつけていても、結局は話す人と話さない人が分かれたから。

—— 冒険として、第1回でそれをやってみるのもいいかもしれない。人となりが分かった上で、2、3、4、5をやれば、もっと違う展開になるかもしれない。

(木村) ただ、募集するときに問題があるかもしれない。何の団体でしたっけ？ って。

本当は、7回くらいあると、4回目に、今回は今までの話題と全然違うことをやります。だからファシリテーターもこちらがやります。1回、全然関係のない議論をしましょうね、というスタイルもできるかもしれないですね。5回でも、2回、2回に分けて、真ん中に入れてもよかったかもしれない。それだったら、最後はまとめのテーマもお願いします、みたいな感じにできる。そんなセットでもよかったかもしれないですね。

—— コミュニケーションのための研究ということが、もう少し前面にあると、

(木村) 出しているはずなのですけど。

—— なんか、原子力、原子力って思って来ている人が多いなと思って。

—— コミュニケーション・マニュアルまで渡しているのに。

(前参加者) たぶん、読んでいないのでしょう。私は(第1期のフォーラムに参加する前に)2回読ませていただいたので、そうか、コミュニケーションを取るのだな、という気持ちで行ったのですけれども。

(木村) はい。では、ひとつのポイントではありましたが、少し議論の参考にさせていただきます。今年のまとめにもしていこうと思います。

## 2. その他

(木村) 最後に、シンポジウムについて少し考えたいと思います。今回のシンポジウムは、研究の最後のシンポジウムなので、研究成果の発表になるのだろうなと思っています。いつくらいがいいですか？

—— 研究成果がいつ頃ならまとまるのか。

—— 去年は10月でしたっけ？

(木村) 去年は9月です。去年はフォーラムの紹介だったので、すぐでしたけれども、今回は研究のまとめなので、最後に1回ということです。

(日程調整：略)

(木村) では、12月20日を中心に決めましょうか。

あとは、今までは森田先生に外部評価委員を務めていただきましたが、今年は無理だと言われたのですね。なので、代わりに、シンポジウムでお話しいただこうかなと思っています。

—— もし20日だったら、午後ですね？

(木村) 午後です。では、それを第一候補にして、いろいろ考えます。

もしくは3月か。3月にやって、それを報告書にさらにまとめるというのは厳しいので、12月にやって、じっくりと報告書を書く時間を取ったほうが、後々楽だと思っています。内容に関しては、まだ何も議論していないので、もう少し様子を見たいと思います。

それから、フォーラム研究会ですけれども、もう 1 回くらいシステム要件についてディスカッションしたほうがいいですか？ 竹中君、どうですか？

—— あまり参考にならないですか？ どうですか？

(竹中) うーん。どのポイントについて議論しますか？

(木村) 今回出てきた話とか、出ていない話についても、いろいろまだ言わなければならないことがあるかもしれない。

(竹中) お任せします。

(木村) そうしたら、もう 1 回やりましょうか。8 月中で、空いている日はありますか？

(日程調整：略)

(木村) では、8 月 19 日の午前中、10 時から 12 時にしましょう。すみません。延長した上に、さらに入れ込みましたけど。

では、次は 2 週間後ですね。よろしくお願いします。

以上